

日本IT書紀

074 真空のとき

05 淹滞篇
卷之十 焦土

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第七十四

真空のとき

一

八月十四日、午前十時半から全閣僚、枢密院議長・平沼騏一郎、参謀総長・梅津美治郎、軍令部総長・豊田副武、書記官長・迫水久常、内閣総合計画局長官・池田純久、陸海軍省軍務局長ら二十三名を前に、天皇が改めて「ポツダム宣言受諾」の「聖断」を下した。以後、以下の手続きが行われた。

・午後一時から閣議。ポツダム宣言受諾の確認と終戦詔勅案の審議。

・ただちにNHKの幹部が召集され、玉音放送の方法を検討。

・午後八時、詔勅草案完成。

・午後八時三十分、天皇自ら詔書に御名御璽。

・午後九時、十五日正午に重大放送が行われる旨の予告ラジオ放送。

・午後十時、詔書に大臣の副署完了。
・同時にポツダム宣言正式受諾をスイス、スウェーデンへ打電。
・午後十一時半から天皇の詔勅録音。

時系列に整理すると、詔勅の録音は自然な事務手続きとして行われたように見える。

だが、天皇自らが詔書を読み上げ、それをレコードに録音してラジオで国民に放送するという方法は、にわかに決定されたものではなかった。実際のところは、情報局総裁・下村宏が八月八日、天皇と面会して進言したとされている。

これが事実とすれば、ポツダム宣言受諾の方針は政府部内でそれ以前に固まっていた、下準備が進められていた可能性がある。八月八日からの七日間は、「国体」すなわち天皇制護持の方策と、戦争の継続を訴える陸海青年将校の説得策を検討することに当てられたわけだった。

ようやくにして官僚たちは、ポツダム宣言無条件受諾に向けて動き出した。

NHKラジオ放送で天皇の肉声による戦争終結の知らせが国民に発せられるまで、皇居を中心とする一角には緊張が覆っていた。

史上、一九四五年八月十四日深夜から十五日早朝にかけての出来事については、多くの体験や見聞が残されているので、ここでは「八・一五」の概略を書くにとどめる。

八月十四日、陸軍大臣・阿南惟幾が公邸に戻ったのは午後一時半過ぎだった。公邸には、夫人の実弟である陸軍参謀・竹下正彦（中佐）が待っていた。戦争継続を唱える決起派将校の一人である。

竹下は懸命に阿南を説得した。

——陸相が決意し、近衛師団が動けば東部軍が決起するに違いありません。

——日光に疎開している皇太子を立てて国体護持の本土決戦を断行すべきではありません。

と竹下は言った。

その義弟に阿南は

「自分が立つても、東部軍は動かないよ」

と答えた、といわれる。

竹下はなおも公邸にとどまり、食い下がった。

午後十一時過ぎ、皇居御文庫衛兵（近衛師団第二大隊第五中隊）の児玉金作（中尉）は、師団長・森赳が前触れもなく単身で巡回に来たことに、わずかに不審を感じた。

児玉の証言によると、森は

「しっかりお護りせよ」

と声をかけ、御文庫に向かって拳手の礼をして去っていた。

児玉は御文庫の中で何が行われているか、薄々は感じていたが、このとき皇居内の別の場所で戦争継続を主張する将校たちがクーデターを起こしつつあることまでは知らなかった。

その二時間後、森はクーデター派の畑中健二（少佐）に殺害される。

陸軍参謀の職にあった古賀秀正（少佐）らは偽の命令書を発令して師団を動かす画策を行う一方、午前四時過ぎ、畑中、同腹の井田正孝（中佐）が最後の頼みの綱である陸軍大臣・阿南の決起を促すべく公邸を訪れた。だが竹下の表情を見て畑中、井田は陸相説得が不首尾に終わったことを知った。

十五日午前四時四十分、阿南は「一死を以て大罪を謝し奉る。神州不滅を確信しつつ」と遺書して大臣室で切腹した。竹下が介錯した。死亡確認は同日午後七時十分である。享年五十八。

畑中と井田は陸軍大臣公邸から取って返し、詔書の録音レコードを奪うべく工作を開始した。録音作業を行ったNHKの技術者たちは宮中から出るとき厳しい検問を受けた。彼らは録音盤を持っていなかった。

——宮中のどこかにある。

と判断した畑中と井田は侍従・徳川義寛に

——録音盤をお渡し願いたい。

と迫ったが、「知らぬ」の一点張りだった。

侍従の頬に鉄拳が飛んだ。それでもこの侍従は口を割らなかつた。この間に正副の録音盤二枚が高松宮の手を経てNHK放送局に運び込まれた——というのだが、この話にはもうひとつ尾鱈がある。

録音盤は十五日早朝まで、畑中らが占拠した宮内庁の一室のロッカーの中に入っていた。職員の私物を雑然と詰め込んだ雑納袋に録音盤は隠されていた。天皇の肉声を録音したレコード盤がそのような場所にあるとは、クーデター一派は考えもしなかつた。

ともあれクーデター一派は東部軍司令部の同調が得られず、終戦の詔勅を録音したレコード盤の奪取にも失敗した。十五日早朝、東部軍司令官・田中静彦（大将）が自ら皇居に乗り込んで近衛師団の諸部隊を帰還させた。ために企みは潰えた。

畑中はなおもあきらめず、NHK放送局を占拠してラジオ放送で国民に決起を呼びかけるを試みたが、これも成功しなかつた。次いで椎崎二郎（中佐）とともに宮城周辺で徹底交戦を記した檄文を撒布した。

玉音放送直前の十一時二十分、椎崎と畑中は二重橋と坂下門の中間の松林に正座し、畑中は拳銃で額を撃ちぬいた。椎崎は軍刀を腹部に突きさし、さらに拳銃で頭部を打ち抜いて自決した。彼らの慰霊碑は、東京・浜松町にほど近い青松寺にある。

二

第五航空艦隊司令長官の宇垣纏（中将）は、鹿児島県鹿屋基地にいた。彼は八月十四日、連合艦隊司令長官小澤治三郎中將から「対ソ及対沖繩積極攻撃中止」の命令を受けていた。また宇垣は戦略指導の観点からアメリカのサンフランシスコ放送を聞いていたので、日本がポツダム宣言を正式に受諾したことを承知していた。

十五日、正午に流された天皇の肉声による詔勅朗読を確認した宇垣は、その日記『戦漢録』に

多数殉忠の将士の跡を追い特攻の精神に生きんとするに於いて考慮の余地なし。顧みれば大命を拝してより茲に六月、直接の麾下及指揮下各部隊の決戦努力に就いては今更呶々を要せず、指揮官として誠に感謝の外無し

と記した。

すでに覚悟を定めていた彼は軍装の襟から階級章を外し、艦上爆撃機「彗星」に乗り組んだ。これに十機の「彗星」が従った。離陸したのは午後四時ごろと伝えられる。午後七時三十分、機上より打電

本戦ハ部隊員が桜花ト散リシ沖繩ニ進ミ
皇国武人ノ本領ヲ發揮シ驕敵米艦ニ突入撃沈ス

宇垣中将機を含む八機が未帰還となった。アメリカ軍側によると、八月十五日午後八時過ぎ、沖繩の本部伊平屋島にあったアメリカ軍兵站地に突入・自爆した「彗星」二機が記録されている。享年五十五。

特攻攻撃を決定した軍令部次長の大西瀧治郎（中将）は十六日未明、割腹して自殺した。

遺書にいわく、

特攻隊の英霊に曰す、善く戦ひたり、深謝す、最後の勝利を信じつゝ、肉弾として散華せり

然れどもその信念は、遂に達成しえざるにいたり、吾死を以て旧部下の英霊と遺族に謝せむとす

彼が特攻作戦を思いついたのは、真珠湾奇襲攻撃のとき、被弾したために帰還を断念した飯田房太郎（大尉）が、アメリカ軍基地の兵器庫に突っ込んで自爆したことがヒントになった。享年五十四。

宮城事件と同じ動きは水戸に本部を置いていた水戸教導航空通信師団でも起こった。

十七日早朝、同師団に所属する約四百人が青森発上野行き列車を乗っ取って東京に進軍したが、近衛第二師団のクーデターが失敗していたことを知って戦意を喪失した。

また厚木飛行場の三〇二航空隊が断固決戦を主張し、小園安名（大佐）の名で

「連合艦隊指揮下より離脱する」

と宣言して首都上空からビラを撒いた。

彼らは彗星や天山に飛行兵二名、三名が搭乗して全国の飛行基地に降り立ち、檄を飛ばすとともに同乗の一名が別の戦闘機一機、二機を操縦して帰還するということを繰り返した。その結果、厚木基地には型式の異なる様々な戦闘機や爆撃機が集結し、決戦が可能な機数が整った。

ところがマラリアの持病を持っていた小園大佐が高熱を発して病院に移され、また天皇の弟である高松宮宣仁がこ

れを知って、自ら基地航空隊飛行長・山田九七郎（少佐）に電話をして兵たちを説得せしめた。同基地が武装解除されたのは八月二十一日である。

台湾の日本軍基地では、八月十五日に出撃する予定の特攻機五十機が滑走路に並んでいた。同日、酒保が開かれ隊員たちがうかれ騒いでいるうちに、基地司令が全機のプロペラを外してしまった。飛行服を隠し、隊員を諦めさせた陸軍航空基地もあった。

ともあれ、満州事変から数えて十五年に及ぶ戦争に、こうして終止符が打たれていった。

三

第三機動部隊の艦載機と厚木基地の日本軍機が最後の空中戦を戦っているさなか、日本時間八月十五日午前八時四分、サンフランシスコ放送が

「日本がポツダム宣言の無条件受諾に同意した」

と伝えた。この放送は超短波で流され、太平洋全域に展開するアメリカ軍やオーストラリア軍は発砲を停止した。ハルゼーが太平洋艦隊司令長官ニミッツから戦闘停止命令を受けたのは、その二時間五十一分のち、午前十時五十五分だった。彼はただちに第一次攻撃隊と、続いて発艦して

東京に向かいつつあった第二次攻撃隊に

「全機、帰投せよ」

と発信した。

これが第二次大戦の最後の戦闘命令となった。

彼は、日本本土上陸作戦が実行に移されずに済んだことを神に感謝した。

折り返し編隊のリーダーから

「日本軍機が追撃してきたら、どのようにすればいいか」という質問があった。

ニミッツは言った。

「友好的に対応しろ」

攻撃機はその意味を理解し、抱えていた爆弾を次々に海に投下し始めた。

麾下の全艦船が、一斉に汽笛とサイレンを鳴らし、将兵はホイッスルを吹いた。ホイッスルは攻撃機の発艦や敵機の襲来を知らせる合図だったが、このときのそれは違っていた。

ほぼ同時刻、マニラの南西太平洋司令部にいたマッカーサーは、ワシントンから

「貴官を合衆国陸軍元帥に任じ、併せて日本占領の連合国軍総司令官に任ずる」

という電報を受領した。

当日は北海道の一部を除いて、全国的に快晴だった。正午から「重大放送」があるということが、前もって国民に知らされていた。首都・東京の上空には真夏の青空が広がり、アメリカ軍機は一機たりとも姿を見せなかった。

正午の時報のあと、やや甲高くか細い声が流れてきた。雑音がひどく、

「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……」

という部分しか聞き取れなかった。多くの人の感想は「難しくて、よく分からなかった」というのが実際だった。

肩を震わせ、唇を噛みしめ、あるいは拳を堅く握ってこらえ泣く人が何人かいた。そういう人々の姿から、多くの国民は「戦争に負けた」ということを理解した。

油蟬の声ばかりが聞こえていた。

日本中の時が止まった。真空のときが訪れた。

同日を以って鈴木貫太郎内閣は総辞職し、十六日午後四時、日本の陸海軍に停戦の指令が出た。

その知らせは無線で満州、中国、インドシナ、ビルマ、フィリピン、ミンダナオ、太平洋諸島に向けて発信され、各地に配属されていたハム愛好家の兵士が自作の機械で受信して全隊に知らせたケースもあった。

だが、この知らせは沖縄の洞窟に立て籠もっていた兵士や市民には届かなかった。アメリカ軍は日本の降伏を知らせるビラを空から撒いたが、第二十四師団の歩兵第三十二聯隊、第一大隊はこれを信用しなかった。

実際、十八日になってもアメリカ軍は「馬乗り」で市民が立て籠もる国吉大地の洞窟に手榴弾を放り入れ、火炎放射器で焼き、逃げ出してくる人影を機銃で撃ちまくった。

二十二日に至って日本語が達者な将校がスピーカーで日本の降伏を知らせ、二十三日、第一大隊の伊東孝一大尉が「軍使」としてアメリカ軍陣地に赴いて事実を確認した。

第三十二聯隊と第一大隊が武装解除に応じたのは二十九日だった。同じく第二十四師団の第二大隊も、降伏を知らずに抗戦を続けていた。この部隊の説得に当たったのは第一大隊の伊東孝一大尉である。

九月四日、第二大隊の武装解除をもって沖縄戦は終結した。

八月十七日、皇族の東久邇宮稔彦が組閣した。同日、満州では皇帝・溥儀が退位し、満州国が消滅した。朝鮮では日本総督府が解体し、呂運亨などによる独自政府樹立の動きが始まった。十八日には上海、広州、天津、青島などにアメリカ軍が上陸し、混乱の収拾に当たった。

~~~~~ 補注 ~~~~~

下村 宏 しもむら・ひろし／1875～1957。和歌山県出身で東京帝国大学から通信省に入り、一九一五年台湾総督府民政長官、総務長官を務めた。二二年朝日新聞社に移って専務、副社長、三七年貴族院議員を経て四三年日本放送協会会長に就任した。「人種改良を国策に」「障害者や犯罪者は断種すべき」と主張し四〇年「国民優生法」を成立させた。

竹下正彦 たけした・まさひこ／1908～1989。陸軍士官学校四十二期。終戦時、陸軍省軍務課内務班長・中佐。のち自衛隊に入り陸将、陸上自衛隊幹部学校校長となった。父・竹下平作は陸軍中将、兄・宣彦は陸軍中佐、弟・光彦は陸軍中佐、姉・綾子は陸軍大臣。阿南惟幾に嫁ぐという陸軍エリート一家だった。

森 越 もり・たけし／1894～1945。高知県に生まれ一九一六年陸軍士官学校、のち陸軍大学校を出て三二年関東軍参謀、三三年騎兵学校長、三七年第一軍参謀、四二年第六軍参謀長、四三年憲兵司令本部部長、四五年中将に進み近衛師団長。ニックネームは「和尚さん」だった。

畑中健二 はたなか・けんじ／1912～1945。陸軍士官学校四十六期。終戦時陸軍軍務局員・少佐。純朴で物静かな文学青年といった印象だったという。

古賀秀正 こが・ひでまさ／1919～1945。陸軍士官学校五十二期。終戦時少佐。森師団長殺害後、偽の師団長命令を作成した。

井田正孝 いだ・まさたか／1912～2004。陸軍士官学校

四十五期。同期に椎崎二郎(ともに終戦時中佐)がいた。所論「戦争遂行の可能性」(松谷誠「大東亜戦争収拾の真相」芙蓉書房)がある。

終戦詔勅録音盤 NHKの技術陣は万一のことを考えて録音盤を三枚、同時に作成した。一枚は正盤として放送に使われたあと破壊され破棄、副盤一枚は現在もNHKのどこかに保管されている。残る副盤一枚の行方は現在も知れない。

椎崎二郎 しいざき・じろう／1911～1945。自決に臨んでしたためた遺書は「至誠通神」だった。

宇垣 纏 うがき・まとむ／1890～1945。岡山県に生まれ一九一二年海軍兵学校卒、二四年海軍大学校を出て二八年ドイツ駐在ののち連合艦隊参謀、四一年第八艦隊司令長官、同年連合艦隊参謀長として山本五十六を補佐した。四三年四月山本五十六座乗機撃墜のとき座乗した二番機が撃墜されゲリラの捕虜となった。のち救出され四四年第一艦隊司令官、四五年第五航空隊司令長官となり、同年八月十五日沖縄方面に出撃して戦死したとされる。

大西瀧治郎 第五十八「誤認」補注

小園安名 おぞの・やすな／1902～1960。海軍台南海軍航空隊副長(中佐)のとき、零戦パイロットを訓練した。また第二五一航空隊司令(大佐)としてアメリカ軍の重爆撃機を撃墜する「斜め銃射撃法」を編み出すなど創意工夫の持ち主だった。終戦時は厚木基地三〇二航空隊司令。台湾航空隊、ラバウル航空隊の部隊長として赴任中にマラリアを患い、それが持病となっていた。

伊東孝一 いたう・こういち／1921～…大尉の位だったが



上官が戦死したため先任将校として第一大隊長の職務にあった。著書『沖繩陸戦の命運』（非売品）がある。H U F F P O S T「沖繩戦で生き残った男が「封印」した356通の手紙。時空を超え、若者たちが遺族に届ける」参照。

**東久邇稔彦** ひがしくに・なるひこ／1887～1990。明治天皇の没後、健康状態が思わしくなかった大正天皇の後継者問題に関連して、父親の久邇宮朝彦が長く広島に幽閉に近い状態で隔離されていた。そのこともあって、皇族ながら反体制的な気骨を持つていた。第二次大戦後の東西冷戦をいち早く見抜いていたといわれる。著書に『「皇族の戦争日記」（一九五七）などがある。

**皇帝・溥儀** ふぎ／正しくは愛新覺羅溥儀／Aixinjueluo Puyi／1906～1967。清朝第十一代光緒帝の弟・醇親王の子として北京に生まれ、〇八年西太后の推薦で三歳で皇帝に即位し「宣統帝」と称した。辛亥革命の翌年退位したが紫禁城で生活することが許された。しかし、馮玉祥のクーデターから逃れるために天津の日本租界に移った。三二年、日本政府の後押しで満州国が成立すると執政に就任、三四年皇帝の座に就き「康德帝」となった。四五年八月ソ連軍に逮捕されたが五〇年中国に身柄を移され五九年特赦、のち六四年政治協商会議全国委員に選出された。

**呂運亨** ヨ・ウンヨン（りょ・うんこう）／1886～1947。

第一次世界大戦が勃発した一九一四年、中国に亡命して上海に樹立された亡命政権「大韓民国臨時政府」に参加した。三三年「朝鮮中央日報」社の社長となって朝鮮の若者に向けて「日本軍に志願するべきである」など親日的な発言をしていたとされるが、否定する向きもある。一九四五年八月十五日、日本の朝鮮総督府からポツダム宣言無条件受諾後の混乱を抑えるよう依頼され、朝鮮

建国準備委員会を立ち上げた。九月六日付で「朝鮮人民共和国」の樹立を宣言したが、五日後、アメリカ軍政庁が設置されて瓦解した。

# 日本IT書紀 074 真空のとき

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。